大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

栄西が将来したものについて：日中交流からみた僧・栄西

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩間, 眞知子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004324

栄西が将来したものについて
―日中交流からみた僧・栄西

岩　間　眞知子

【はじめに】

栄西は平安時代末期に二度、中国・宋に渡った僧である。遣唐使の廃止後、栄西の前にも数名の僧侶の渡航はあったが、栄西以後、僧侶の往来が盛んになる。そのため中世の僧侶の日中交流の先駆けと位置付けられよう。そして平安前期の僧・最澄や空海らのように、栄西も中国から有形無形の多くのものを日本にもたらした。そればかりでなく、栄西は中国で寺院建築の修復・造営に貢献し、日本から建築材料の木材も送っている。

本稿では日中交流の観点から、栄西は日本に何をもたらし、また中国にどのような事績を残したのかを見て行きたい。まず栄西の入宋は具体的にどのようであったのだろう。入宋中の栄西の動向について、近年、佐藤秀孝氏らが中国の文献資料なども加えて、綿密な研究成果を発表[1]された。そうした先行研究を参照しながら、さらに栄西の著作や遺物から、栄西の日中交流に果たした事績を明らかにしていきたい。これまで筆者は『喫茶養生記』を中心に研究してきたが、栄西は僧侶であり、茶についてのみ功績を残したのではない。栄西の事績を明らかにしていくことから、その思想の理解が深まり、ひいては『喫茶養生記』の意図や意義も一層、明確になると考える。

【最初の入宋の前に】

栄西が最初に中国大陸に渡ったのは、仁安３年（1168）春４月、28歳の時であった。入宋前のこととして、栄西の主著『興禅護国論』には次のような記事がある。

> 渡海の志ありて、鎮西博多津に到る。二月、両朝通事の李徳昭に遇って伝え言うを聞くに、禅宗有り、宋朝に弘まると。
>
> 有渡海之志、到鎮西博多津。二月、遇両朝通事李徳昭、聞伝言、有禅宗弘宋朝。
>
> （巻中・第五宗派血脈門[2]）

この日中両国の通訳であった李徳昭は、当時80歳で、栄西に次のようにも語っている。

昔、鎮西筑前州博多津の通事李徳昭というもの、八十歳の時、語って曰く「余、昔、二十余歳のとき、東京（開封）に於いて梵僧（インドの僧）を見る。下に単裙を著け、上に袈裟を被す。冬、寒を苦しめども、而も余衣を著けず。明春、西土に帰る。曰く「若し此に在らば、仏制を犯せん」と。（宋の乾道四年、日本の仁安三年戊子なり。）昔、鎮西筑前州博多津、両通事李徳昭、八十歳之時語曰、余昔二十有余歳、於東京見梵僧。下著単裙、上被袈裟。冬苦寒而不著余衣。明春帰西土。曰若在此、犯仏制」（宋乾道四年、日本仁安三年戊子。）（『興禅護国論』巻下・第九大国説話門[3]）

栄西は李徳昭から、南宋では禅宗が盛んな事と、中国にいたインド僧は寒さの中でも衣を重ねず、下には一重の腰衣、上には袈裟のみを着ていた。それも戒律を堅持するためであったと聞き、最初の渡航前から禅とインドに心を動かされていたことが確認できる。

【最初の入宋】

栄西は春４月に博多を発ち、４月24日に明州の港に着いた（『栄西入唐縁起』[4]）。明州は浙江省東部に位置する港湾都市で、慶元府（南宋）、寧波（明代以降）とも呼ばれた。明州には三江口という三つの川の合流地点がある。杭州湾から甬江を上ると、三江口に至り、そこから余姚江を進むと南宋の都・臨安に、奉化江を進むと内陸に到る。こうした三江口のある明州は水上交通の要で、古くは遣唐使がここから長安をめざし、日宋・日明貿易でも中国海上交易の最大の窓口であった。そこは交通の要地であるとともに、阿育王寺・天童寺・普陀山など仏教寺院が点在する聖地でもあった。

栄西は明州に到着後、広慧寺の知客と問答をした。広慧寺は唐代（872年）に創建された禅寺で、知客は禅寺で来客をもてなす接待長である。

初め広慧寺の知客禅師に見えて、問うて曰く「我が国の祖師（最澄）、禅を伝えて帰朝す。その宗、今、遺欠す。予、廃を興さんことを懐う。故に此に到る。願わくは法旨を開示せよ。その禅宗の祖師達磨大師の伝法の偈、如何」と。（中略）知客、答えて曰く「（中略）久しく聞く、日本国、仏法流通すと。幸いに吾が師（栄西）に逢う。須らく筆語を奉ずべし。然して人に華夷の異あれども、而も仏法は総に是れ一心なり。一心纔かに悟れば、ただこれ一門なり。」と。

初見広慧寺知客禅師、問曰、我国祖師、伝禅帰朝。其宗今遺欠。予懐興廃。故到此。願開示法旨。其禅宗祖師達磨大師、伝法偈如何。（中略）知客、答曰、（中略）久聞日本国仏法流通。幸逢吾師。須奉筆語。然人有華夷之異、而仏法総是一心。一心纔悟、唯是一門。（『興禅護国論』巻中　第五宗派血脈門[5]）

栄西は広慧寺の知客に最澄が曾て伝えながら、今は欠けた禅の法旨について尋ねる。知客は仏法は一心であるから、あなたとは中国と日本という区別を超えて筆語を交えようと答える。このことは『元亨釈書』[6]にも『延宝伝燈録』『本朝高僧伝』[7]にも見え、そこでは更に知客は祖師禅を究めようとするならば、従前の知見を抛下するように説いている。これら資料を見ると、入宋以前から栄西は禅の知識を持ち、禅寺を訪れ、禅について問い、禅を究める気持ちを持っていたことになる。

その後、『栄西入唐縁起』によれば、明州で栄西は重源と出会う。重源（1121-1206）は、後に平重衡に焼かれた東大寺の再建のために勧進し、大仏殿や南大門などを再建した僧である。時に、重源は48歳、栄西は28歳、重源は栄西より、20歳の年長であった。

【舎利信仰と栄西】

栄西と重源の二人が一緒にまず訪れたのは、阿育王山広利禅寺という、南宋禅林でも著名な大刹であった。ここは古代インドのアショーカ王（阿育王）が作った八万四千の仏舎利塔の一つが地中から湧出した地と言われ、歴代の皇帝はじめ僧俗が崇敬した。中でも、呉越国の最後の王・銭弘俶（929～88）の故事がよく知られる。南宋の『仏祖統紀』によると、銭弘俶はアショーカ王の故事に倣い八万四千の塔を造り、そこに「宝篋印心呪（陀羅尼）経」を刷って塔に入れ、領内に広めたという[8]。

「宝篋印陀羅尼経」は、舎利（釈迦の骨）の代わりに納める経典、つまり法舎利である。「宝篋印陀羅尼経」の宝篋は宝を入れる箱、印は価値の高いこと、陀羅尼はインドの呪文を漢訳せずそのままの音を読誦するもので、それは罪障消滅・長寿の功徳がある経とされた。実際に銀・銅・鉄製の銭弘俶塔が出土し、浙江省紹興市で発見された鉄塔からは乾徳３年（965）刊行の「宝篋印陀羅尼経」版本が見出された[9]。

銭弘俶塔のうち、銅塔数基が日本に伝存している。そのうちの一基（図１　中国・五代　顕徳２年〔955〕重要文化財）は、福岡の誓願寺に所蔵される。誓願寺は福岡県今津にあり、筑前怡土荘の豪族仲原氏の娘の発願で、安元元年（1175）栄西を招いて創建された。栄西は初度の渡宋から帰国して後、誓願寺を拠点に活動していた。誓願寺所蔵の銭弘俶塔は、寺伝では栄西が宋から将来したといい、江戸後期の筑前の国学者・青柳種信も「千光国師、宋国より将来之物」として、この塔を図に描く[10]。

ところが従来、この銭弘俶塔（宝篋印塔）は平安中期に中国に渡った肥前出身の天台僧・日延が将来したものとみなされていた[11]。『扶桑略記』の「宝篋印経記」には、日延が呉越王・銭弘俶塔の一つを得て中国から天暦末年（11年　957）に帰国し、肥前国

図１　奈良国立博物館『聖地　寧波』図33より

の国守に唐物として渡し、銭弘俶が塔を造った経緯を語ったとある[12]。

誓願寺に何時、この銭弘俶塔（宝篋印塔）が収められたかは不明である。誓願寺の塔が日延の将来物であったならば、栄西は入宋前、少なくとも誓願寺在住の二度目の入宋前に、日本の天台僧が阿育王寺に行き、インドのアショーカ王ゆかりの塔を将来したことを知っていたことになる。その塔の由来も栄西がインドへの渡航を目指す契機の一つであったかもしれない。なぜなら栄西はインドで八塔を拝すことを目的に中国に渡ったからである。八塔は釈迦入滅後、舎利（釈迦の骨）を八つに分割し祀った塔である。その内の七つから舎利を取りだし、阿育王は八万四千の塔を造ったとされる。

誓願寺の銭弘俶塔が栄西の将来物であれ、あるいはなくとも、栄西の舎利塔に対する信仰は強かったにちがいない。栄西と中国で行動を共にした重源は、再興した東大寺の大仏の開眼供養に先立ち、大仏の胎内に舎利を納め、後述するように東塔（舎利を納める建造物）の建築を回廊よりも優先した。また各地の別所や寺社に舎利塔を造置し、仏舎利信仰は阿弥陀信仰と並ぶ重源の信仰活動の重要な柱であったという[13]。また栄西と関わりがあったと伝えられる明恵上人の髪爪を納めたという宝篋印塔が高山寺にあり、それは阿育王塔を模して造られたもので、日本最古級という（『高山寺縁起』[14]）。

そうした日本の舎利信仰の中国におけるメッカともいうところが、寧波の阿育王寺で

あった。佐藤秀孝氏によれば、栄西と重源が訪れた当時、阿育王山は1000人近い修行僧が集う一大叢林であったと見られ、そこで二人は清規に基づく南宋禅林の実際のありように直に触れたと考えられるという。

【天台山巡礼】

次いで、栄西と重源は天台山に向かう。隋代に天台智顗（538-597）が始めた天台宗発祥の地であり、日本の天台宗の開祖・最澄が訪れた地であった。二人が天台山を訪れた様子は、次のようであったろう。後に栄西に臨済宗を授けた中国僧・虚菴懐敞が、栄西との別れにあたって述べた言葉の中に、次のようにある。

> 乾道戊子の歳、天台に遊び、山川国土の勝妙なると道場の清浄殊特なるを見て、大歓喜を生じ、嘗て浄財を施し、十方の学般若の菩薩に供す。已にして石橋に至り、香を拈じて茶を煎じ、住世の五百大阿羅漢を敬礼す。
>
> 乾道戊子歳、遊天台、見山川国土勝妙、道場清浄殊特、生大歓喜。嘗施浄財、供十方学般若菩薩。已而至石橋、拈香煎茶、敬礼住世五百大阿羅漢。（『興禅護国論』巻中「第五宗派血脈門」[15]）

栄西は天台の自然環境に感動するとともに、道場の清浄にも驚いた。そこで浄財を喜捨して、学道に精進する修行僧たちに供養し、更に石橋を過ぎ、香をたき茶を煎じ、五百羅漢に敬礼したという。この経緯を後世の『元亨釈書』は、天台山の石橋で二人は青龍を見、生身の阿羅漢が応現するのを感じ、栄西が茶を献ずると異花が盞（茶碗）に現じたと潤色している。五百羅漢は方広寺の事であろう。後に栄西が修行する万年寺をこの時に訪れたと、江戸時代の高峰東晙は年譜に記すが、ほかでは確認できない。

【重源と阿育王山の舎利殿修造】

およそ半年間の中国滞在ののち、栄西は重源と共に帰国するが、帰国前にふたたび阿育王山を訪れ、「舎利殿修造の事を請う」（『栄西入唐縁起』）、つまり阿育王山の舎利殿の修造を願い出ている。重源の『南無阿弥陀仏作善集』には「大唐明州の阿育王山に、周防国御材木を渡して、舎利殿を起立し奉る。修理の為、又柱四本と虹梁一支を渡し奉る」[16]とある。中国側の資料「阿育王山妙智禅師塔銘」（1188年撰）にも「日本国王、師の偈語を閲し、自ら言う。発明するところあり。国を遜り以て釈氏に従うに至り、歳に弟子の礼を修む。辞幣甚だ恭しく、且つ良材を以て舎利殿を建つ。器用精妙、荘厳無

比。」（楼鑰『攻媿集』巻110[17]）とある。おそらく重源は阿育王山の妙智禅師の偈を日本に持ち帰り、その偈に感銘を受けた日本国王（後白河法皇）は、海を隔てて禅師に弟子の礼をとったのであろう。重源は後白河法皇の協力を得て、周防国の良材を阿育王山に送り、舎利殿の建立に尽力した。

後白河法皇が師事したという妙智禅師（1119-1180）は、25年間にわたり阿育王山に住し、寺主として寺院経営にあたった。高宗から寺田の寄進を受け、また「釈迦真身の舎利」信仰を喧伝して勧進を行い、伽藍修造をおこなった。重源と栄西が阿育王山に参詣し、舎利殿の修造を請け負ったのも妙智禅師の勧進によるものであろう[18]。阿育王山の妙智禅師の事跡（勧進と伽藍修造）は、東大寺再建における重源につながり、さらに重源の事跡は、栄西の中国や日本での仏寺の建立や修理、さらに仏寺の資材（木材）の提供につながろう。

【両度の入宋の間―密教研究の深化と禅の研究】

栄西は帰国すると、日本の天台座主・明雲に、天台新章疏30余部60巻、宋地の台宗酬酢（しゅうさく）の言、彼の地の名徳書文を渡している。天台新章疏は天台宗の経典の新しい注釈書、台宗酬酢の酬酢とは、主人と客が互いに酒を酌み交わすことから、天台宗の僧との教義のやり取り、そして彼の地の名徳つまり中国の名声高く徳のある僧の書であろう。少なくともそれらを中国からもたらし比叡山に届けている。いずれも天台宗関連である。

一方、中国で盛んであった禅宗に触れた栄西は帰国後、日本の比叡山の伝統の中にも、禅のあることを見出したと述べている。

> 秋に及んで帰朝す。而して安然の『教時諍論（きょうじじょうろん）』を看て九宗の名字を知り、又た智証の『教相同異』を閲て、山門相承の巨細を知り、又た次に伝教大師の『仏法相承譜』を見て、我が山に稟承（ひんしょう）あることを知る。」
>
> 及秋帰朝。而看安然教時諍論、知九宗名字、又閲智証教相同異、知山門相承巨細、又次見伝教大師仏法相承譜、知我山有稟承。（『興禅護国論』巻中　第五宗派血脈論[19]）

天台僧・安然（841?-915?）は『教時諍論』で、宗派として南都六宗と天台・真言二宗に、禅宗を入れて九宗とし、その中で禅宗を真言に次ぐ第二の教えとした[20]。また智証大師・円珍（814-891）の『諸家教相同異略集』にも、更に伝教大師最澄の『内証仏法相承血脈譜』にも達磨大師以来の禅が比叡山に受け継がれていたと改めて確認する[21]。確かに最澄の請来した経籍には『曹渓大師伝（六祖慧能伝）』ほか若干の禅籍があり、円

仁・円珍の求法目録にも南宗系の禅籍があるという[22]。

またこの期間に栄西は、禅以上に密教の研究そして著述や弘法活動に打ち込んでいる。「予、廿八歳、入唐帰朝以来、他事無く、真言聖教を学ぶ」（『栄西入唐縁起』）とあるように、帰国後は、伯耆大山の基好から密教の法を授かり（『金剛頂宗菩提心論口決』）、『胎口決』、『出纏大綱』、『誓願寺縁起』、『教時義勘文』『秘密隠語集』、『菩提心論口決』[23]など、精力的に密教関連の著作を行う。

後に栄西は天台宗葉上流の祖と称される。小此木輝之氏によれば、天台宗葉上流とは、密教では大山の基好から授かった穴太流、蓮華院流や智泉流などの谷諸流と、川流、さらに東密小野流も受け、顕密兼学であり、後にはさらに禅も兼ねた法流で建仁寺流あるいは葉上流とも言われる。それは弟子の栄朝、さらに円爾らに受け継がれていく[24]。円爾は後に、顕密諸宗の影響の大きい京都に東福寺を創建するが、当初は天台・真言の僧も置いていた[25]。栄西にとって、二度目の入宋前は密教を深く研鑽する期間であった。

【宋風書の移入】

この期間の治承２年（1178）７月15日、盂蘭盆会で栄西は法華経の講義と善男善女による奉写を誓願寺で行った。その経緯を記した栄西自筆の『盂蘭盆一品経縁起』が、誓願寺に残る。それは北宋の能書・黄庭堅の流れを汲む流麗な書として評価され、国宝に指定される。この栄西の書は、日本における宋風の影響を明らかに示す最初の遺品と、久保木彰一氏はいう[26]。当時の日本の書は、ほとんどが和様であった。そうした中で書においても、栄西は中国宋代の新たな書風を日本にもたらしている。

【二度目の入宋】

栄西の二度目の渡航は、初度から19年後の47歳であった。「予、西天（インド）の八塔を礼せんことを懐ふて日本文治三年丁未の歳春三月、郷を辞す、諸宗の血脈並びに西域の方誌を帯びて宋朝に到る」（『興禅護国論』巻中・第五宗派血脈門[27]）。宋からインドに行き、八塔つまり釈迦の舎利塔を拝す目的であった。

文治３年（1187）４月25日、杭州の臨安に着き（『栄西入唐縁起』）、直ちに役人に天竺に向かいたいと願い出るが、西域に行く道はいずれも金や遼に占領され、許しを得ることができず、日本へ帰還しようと船に乗る。ところが逆風が起こり温州瑞安県に戻ってしまい「自ら謂えらく、未だ参訪を究めず。故に風濤、我れを阻むるならん」（『洛陽

東山建仁禅寺開山祖師明庵西公禅師塔銘』[28])、行く手を阻む風濤は、帰国せず参訪を遂げるよう励ますものではないかと栄西は考え、天台山に向かう。

天台山万年寺は、唐代に百丈懐海（749-814）の法を継いだ平田普岸（770-843）により創建された禅刹で、南宋末期には臨済宗黄龍派の禅者が拠点としたという。インド行きを断念した栄西がなぜ天台山に向かったのか、天台山の寺院の中でもなぜ万年寺を選んだのか、その理由について、栄西自ら述べたものは見あたらない。姚国坤氏は、万年寺が南宋の禅林中の名刹であったことを、南宋・葉紹翁の『四朝見聞録』の以下の文を引用して証された。宋の孝宗（在位　1162-89）が「天下の名刹は何処が最も佳いか」と尋ねると、学士の宋子瑞が「万年（寺）、国清（寺）を以て最と為す」と答えたという[29]。禅林中の名刹であったことが選択の理由であったのだろうか。だが栄西の渡宋より十数年後の南宋末・嘉定年間（1208-1224）に、史弥遠の奏請によって定められた五山（禅宗寺院の最高寺格）に万年寺は含まれない。

一方、栄西が帰国して８年後の正治元年（1199）に入宋した泉涌寺の開山・俊**芿**は、中国浙江で北峯宗印（1148-1213）に師事し天台宗を修めている。五代後周の世宗（在位952-9）の廃仏毀釈後、天台宗は不振となったが、五代末の呉越国王・銭弘叔は大陸で散逸した天台経典を日本や高麗に求め、天台宗を復興した。それは趙宋天台と呼ばれ、十世紀に趙匡胤の建てた宋王朝の名を冠して、それ以前の天台宗と区別するが、栄西入宋当時も大陸に天台宗が存続しなかったことは無い。また北峯宗印は栄西と重源の師でもあったと、後世の記録ながら俊**芿**開基の泉涌寺系の僧は『十不二門指要鈔序私見記』に記している[30]。だが栄西は天台山万年寺に行き、禅僧の住持・虚菴懐敞に出会った。

虚菴懐敞について中国の禅宗史にその名は見えず、事跡はほとんど不明であった。しかし日本の栄西門流の龍山徳見（1284-1358）の『黄龍十世録』の「慶元府天童虚菴懐敞禅師語要」[31]が収録する懐敞の墨跡や法語などにより、虚菴懐敞の出自や俗称は不明だが、道号を虚菴と称し、臨済宗黄龍派の雪庵従瑾に師事、最初は江西省の廬山・東林寺で出世開堂、そこから天台山万年寺、次いで天童山へと遷り、年齢は栄西より少し年長と考えられる、と佐藤秀孝氏は考察された[32]。

虚菴は後述するように、栄西の助力で天童山の千仏閣を再興したが、その成果は文学者であり、参知政事ともなった楼鑰が「天童山千仏閣記」として『攻**媿**集』に書き残している。楼鑰の記述に拠れば、虚菴の仏教者としての評価は高く、修行僧が海外からもあつまり、その強い願いが匠たちを動かし、良材を用いて、千仏閣を作り上げたとある[33]。

【万年寺における栄西】

万年寺において虚菴は栄西に、日本の密教は甚だ盛んと聞いているが、密教の教えについて、端的に一句で答えるよう求めた。栄西が「初発心の時、便ち正覚を成じ、生死を動ぜず、而して涅槃に至る」と答えると、虚菴は栄西の言う通りであるならば、日本の密教と南宋の禅宗は一致しているという。そこで栄西は虚菴に師事する決意をした（『元亨釈書』）。また虚菴は更に密教について栄西に尋ね、栄西が答えると、虚菴は随喜して灌頂の法を受けたいと申し出て、栄西は灌頂の式を整え虚菴に授けた（『菩提心論口訣』奥書[34]）という。

虚菴と栄西のやりとりについて、栄西の孫弟子・道元が次のように評価している。

> 師翁（栄西）、虚菴和尚に問う「学人が善を思わず悪を思わざる時は如何ん」と。虚菴云く「本命元辰」と。師翁云く「恁麼ならば、則ち今日より去らず」と。虚菴云く「若し恁麼ならば、則ち今日去ることを妨げず」と。師翁、礼拝す。虚菴云く「南面して北斗を看る」と。やや久しくして云く「祖師の本命元辰、微笑破顔して一新す。桃花翠竹を仮らず、扶桑は当日に春に逢う」と。
>
> 師翁問虚菴和尚。学人不思善不思悪時如何。虚菴云。本命元辰。師翁云。恁麼則不従今日去也。虚菴云。若恁麼則不妨今日去也。師翁礼拝。虚菴云。南面看北斗。良久云。祖師本命元辰、微笑破顔一新。不仮桃花翠竹、扶桑当日逢春[35]。（『道元和尚広録』巻6「永平禅寺語録」）

難解な問答だが、学人（栄西）が善をも悪をも思わない、つまり善悪の対立を超えた境地とは如何なるものかを問うと、虚菴は本命元辰と答える。本命元辰は生まれ年の干支、即ち栄西自身の本来の面目であり、それはそのまま善を思わず悪を思わざる当体と答えた。すると栄西は今日からは去らず、虚菴に師事したいと述べ、虚菴はそれを受け入れ、また何時去っても構わないと認める。それに対して栄西が礼をすると、虚菴は「南面して北斗を看る」つまり自在に方位を転換できる優れた禅者と称したという。虚菴と栄西の交感は、釈迦と迦葉の拈華微笑を一新し、桃花翠竹という禅の故事をも超え、二人の交感から日本はまさに春となったと、道元は称賛している。

こうして虚菴に師事するようになった栄西は、万年寺の山門や東西の両廊廡（ひさし）を芝券（不明）300万で建て、更に天台山中の観音院・大慈寺（修禅寺または禅林寺ともいう智顗ゆかりの古道場）・智者塔院（天台の初祖・智顗ゆかりの塔院）も修復したという（『元亨釈書』栄西章[36]、「明庵西公禅師塔銘」[37]）。中国側の文献によれば、さらに大池（放生地）も開鑿したという（『嘉定赤城志』巻28[38]）。

淳熙16年（1189）虚菴懐敞が明州の天童山景徳禅寺という高位の寺に移る時、栄西も随ったという。天童山は北宋末南宋初に、曹洞宗の宏智正覚が1200衆もの大叢林として中興し、南宋の禅宗五山では第三位となる寺院である。

虚菴は住持となると、天童山内にある千仏閣（紹興４年に宏智正覚が創建）を修復したいと願った。その意を汲み、栄西は師恩に報いるため、日本に帰国後に良材を送り、千仏閣修復の手助けをしたいと告げた（楼鑰『攻媿集』巻57「天童山千仏閣記」[39]）。

その後、栄西は天童寺から万年寺に戻ったものか、万年寺と行き来したものかは明確ではないが、翌紹熙元年（1190）９月、万年寺で『秘密隠語集』を再治し、それを本国（日本）の門徒に遣ったと、その奥書に記している[40]。

【菩提樹を日本に送る】

同じ紹熙元年（日本・建久元年）、栄西は天台山にある菩提樹を、商船に付して日本に送っている。この菩提樹は、もともと最澄の師・道邃が天台山に植えたもので、栄西はその一枝を日本に送り、筑紫の香椎宮に植えた（『元亨釈書』）。この菩提樹は、後に奈良の東大寺、京都の建仁寺などに分枝される。東大寺の植樹については、重源の『南無阿弥陀仏作善集』に「（東大寺の）鯖木跡に菩提樹を植え奉る[41]」とある。鯖木とは、東大寺創建の時に華厳経をもたらした鯖売りの翁の杖が変じ木となったもので、その鯖木は平家により焼かれたと『今昔物語』などに伝えられる[42]。その鯖木跡に栄西が天台山からもたらした菩提樹を植樹した[43]のだという。東大寺の菩提樹の植樹に重源の関与があったことは確実であろう。なお栄西のもたらした菩提樹は、植物学的にも日本にもたらされた最初のボダイジュという。

【天台山を去る】

翌年、帰国する栄西に、虚菴は袈裟（僧伽梨（さんぎゃり））と共に、次のような書を付した。

> 夫れ昔、釈迦老人、将に円寂せんと欲する時、涅槃妙心、正法眼蔵を以て摩訶迦葉に付属す。乃至、嫡嫡相承して予に至る。今、此の法を以て汝に付属す。汝、当に護持すべし。其の祖印を佩びて、国に帰って化を末世に布き、衆生に開示して、以て正法の命を継げ。又た汝に袈裟を授く。大師、昔、衣を伝えて法の信と為して、本来無物なることを表わす。然れども六祖に至って、衣は止めて伝えずと〔云々〕。其の風、絶えたりと雖も、今、外国の法信と為て、汝に僧伽梨を授くるのみ。又た

菩薩戒を授く。拄杖・応器・衲子の道具、一を留めず付属し畢わる。伝法の偈を聞け。

夫昔釈迦老人、将欲円寂時、以涅槃妙心正法眼蔵、付属摩訶迦葉。乃至嫡嫡相承至於予。今以此法付属汝。汝当護持。佩其祖印、帰国布化末世、開示衆生、以継正法之命。又授汝袈裟。大師昔伝衣為法信、而表本来無物。然至六祖、衣止不伝〔云々〕。其風、雖絶、今為外国法信、授汝僧伽梨而已。又授菩薩戒。拄杖・応器・衲子道具、不留一付属畢。聞伝法偈。(『興禅護国論』巻中　第五宗派血脈門[44])

懐敞は言う、「釈迦から迦葉に伝えられた涅槃妙心、正法眼蔵（さとりの霊妙な心、悟りの真髄）を今また栄西に伝える。それをお前は国に帰って、衆生に開示して教化し、正法の命脈を継ぐのだ。また伝法の印として袈裟を授けよう。達磨大師は、昔、衣を授け伝法の印とし、本来伝える何物もないことを表した。しかし六祖慧能の時に衣を伝えることを止めた。だが外国人であるお前には祖に倣い衣を授ける。さらに禅門の一大事である菩薩戒を授け、拄杖（しゅじょう）・応器などの禅僧の道具も、一つ残さず与える。最後に伝法の偈を聞け」と。

正法と共に袈裟、戒律、そして僧が説法や行脚に用いる杖の拄杖、僧尼が食事に用い、托鉢にも用いる鉢の応器などの禅僧（衲子）の道具すべてを授けると懐敞はいう。

懐敞が栄西に授けたものの中でも、特別なものは袈裟（僧伽梨　僧の着る三種の袈裟のうち最大のもの）である。今日、岡山の金山寺に栄西の将来品として袈裟が遺存する。金山寺は報恩大師開基の伝承を持つ古刹で、火災により衰退していたが、栄西によって本堂などが再建されたという。寺の縁起（重要文化財「備前国金山寺縁起写」1497年）によれば、金山寺には宋から帰国した栄西の請来品の数々が納められ、また栄西を初祖とする葉上流の灌頂が始めて行われた場という。金山寺にある袈裟が虚菴から授けられたものかは不明だが、同寺に所蔵される栄西請来と伝えられる五鈷鈴などとともに興味深い遺品である[45]。

なお、大袈裟（僧伽梨）は栄西だけでなく禅僧を特色付けるものでもあった。その大きな袖は、従来の顕密僧の衣と異なって目立ち、都に大風が吹いたのは禅僧の大袈裟のためだと在世当時の栄西が非難されたことを、無住が書き残している（『沙石集』10、『雑談集』仏法ノ盛衰事）。大袈裟は、新たな大陸の禅文化の一つ[46]であった。

紹熙２年（日本建久２年　1191年）秋７月、栄西は帰国する。その時、天童山から発ったものか、あるいは天台山から帰国したものか議論があるが、「揚三綱の船に乗り、平戸葦の浦に着く。本朝の建久二年なり。建久三年、香椎神宮側において、建久報恩寺

を構え、始めて菩薩大戒布薩を行ず」(『元亨釈書』)。日本に戻って寺院を創建し、栄西は黄龍派の虚菴懐敞から伝えられた臨済宗所伝の「仏祖正伝菩薩戒」を人々に付与した、つまり禅宗の授戒会を初めて挙行した。

【天童寺に材木を送る】

帰国して２年後、栄西は天童山景徳寺の千仏閣の為に良材を送っている。

二年を越し、果たして百囲の木、凡そ若干を致す。大舶に挟み、鯨波に泛んで至る。千夫咸く集まり、江に浮かび河を蔽う。輦して山中に致す。師、笑って曰く「吾が事、済る。」是に工を鳩め材を度り、雲のごとく委み山のごとく積む。楹（はしら）を列ぬること四十、多くは日本より致す所、余は則ち境内の山に取る。始めて紹熙四年季秋の甲申より建て、才かに三載にして畢わりを告ぐ。緡銭を費すこと二万有奇。（中略）凡そ閣を為ること七間。高く三層を為す。棟横十有四丈、其の高さ十有二丈、深さ八十四尺。衆楹倶に三十有五尺。外、三門を開き、上、藻井を為す。井よりして上十有四尺、虎坐を為す。大木交貫、堅緻壮密、牢くして抜くべからず。上層又た高さ七尺、千仏を挙げて之れに居く。（中略）下より仰ぎ望めば、崑**閬**を見るが如し。梵唄鐘磬、半空に響きを振るう。徜徉として登覧し、四山下し瞰る。河漢星斗、欄檻に在るが如し。（下略）

越二年、果致百囲之木、凡若干。挾大舶、泛鯨波而至焉。千夫咸集、浮江蔽河。輦致山中。師笑曰、吾事済矣。于是鳩工度材、雲委山積。列楹四十、多日本所致、余則取于境内之山。始建于紹熙四年季秋之甲申、才三載告畢。費緡銭二万有奇。（中略）凡為閣七間。高為三層。棟横十有四丈、其高十有二丈、深八十四尺。衆楹倶三十有五尺。外開三門、上為藻井。井而上十有四尺、為虎坐。大木交貫、堅緻壮密、牢不可抜。上層又高七尺、挙千仏居之。（中略）自下仰望、如見崑**閬**。梵唄鐘磬、半空振響。徜徉登覧、四山下瞰。河漢星斗、如在欄檻。（下略）（楼鑰『攻**媿**集』巻五七「天童山千仏閣記」[47]）

百囲の木の囲とは、円柱や樹木などの太さを表す言葉で、両手の親指と人差し指を広げてできる輪の円周（約五寸、16.5㎝）、あるいは両腕で囲んだ長さを示す[48]。そこで前者の百倍とすると周囲が約16.5メートルほどの太い木となる。それを大船で挟んで、海に浮かべて中国まで渡した。更に皆で川を上って送ると、虚菴懐敞は送られてきた材木を見て「自分の仕事は終わった」とほほ笑んだという。受け取った天童山では、紹熙４年

（1193年）９月に工事を始め、３年後に完成する。材料の多くは日本からの木材、その他は境内の木を用いたとある。

先には阿育王山、そして天童山景徳寺など寺院の建立や修復に日本から良材を送っているが、木材は当時の日本の重要な輸出品であった。日本の木材は江南の都市部を中心に、調度品や内装用として高値で取引された[49]という。中国では南宋になると、金軍に追われた漢民族が南部に移動、人口が江南に密集し、その需要に応じて近辺の山で木材の伐採を急速に行った。そのため木材の不足が恒常化し[50]、日本の木材は12世紀前半から輸出品となり、13世紀には主力商品だった[51]という。

海商は日本から輸出する木材を、国王・貴臣から委託されたという。木材を売却した代価で荷主の求める品々を買い求めて戻り、海商はマージンを手にした。また寺院が必要とする一切経などの大量の経典や書籍、法会などで使用する大量の香、沈香や白檀などはすべて輸入品であった。莫大な利益を生み出す日宋貿易に、栄西は唐人海商や王家権門と、どのように関わっていたのだろうか。楼鑰の「天童山千仏閣記」に、栄西は「吾れ国主の近属を忝くす（吾忝国主近属）」、つまり国主に近侍しているため帰国後良材を送ると述べたと記されている。重源の阿育王山舎利殿の修復の時と同様、当時の国主とされる後白河院ゆかりの周防の国の良材が送られた可能性が高いと考えられている[52]。国際人として、また寺院建築などで大量の物資を実際に動かしていくマネージャーとして、栄西の働きは実質的にも大きかったと考えられる。

【東大寺の勧進職に就く】

建永元年（1206）、栄西は重源の後を継いで、東大寺の勧進職に就く。翌、建永２年栄西は東大寺勧進所に唐墨八十五廷と唐筆七十五支を寄進している。（栄西自筆書状「唐墨筆献上状」[53]）東大寺に寄贈したのは、中国の産品（唐物）であった。

栄西は勧進職として、東大寺の鐘楼・戒壇院の中門および四面回廊を再建し、七重の東塔再建にも着手している。このうち七重の東塔再建は、重源が大仏殿四面回廊の完成を目前にしながら東塔の造営計画を優先して中断したものであった。造営建築の優先順位をめぐり、重源は東大寺寺僧集団と対立していたが、栄西は仏舎利を祀る塔に執着する重源の遺志を引き継いで、「塔ヲ立ルコソ最上ノ功徳ナレ」（『沙石集』）と造塔を進めたという[54]。宝篋印塔のところで見たように、栄西も舎利信仰が強かったと言えよう。

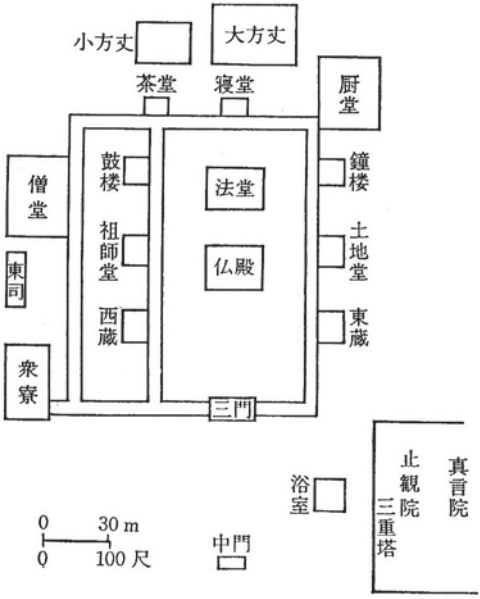
栄西が再建した建物のうち、唯一現存しているものは鐘楼である。大田博太郎氏らによると、東大寺鐘楼の根幹は重源から受け継いだ大仏様であるけれども、組物とその斗

（桝形）の配置、肘木の曲線は禅宗様の系統という。それは禅宗様の皮相的模倣ではあるが、新しい様式を中国から栄西がもたらしたことだけは確か[55]という。つまり栄西は禅宗様建築の先駆けとも言うべき宋風建築様式を取り入れて建てたことになる。

さらに近年の野村俊一氏の研究によれば、東大寺鐘楼に見える詰組は後世の禅宗様と同じであるが、詰組を据え付けるために設ける台輪がないところは禅宗様と異なる。その形式（詰組あり、台輪なし）こそが、当時の浙江地方の仏殿形式で、それを栄西は継承したのではないかとする[56]。

【建仁寺の茶堂】

栄西は東大寺勧進職となる前に、博多の聖福寺・鎌倉の寿福寺・京都の建仁寺なども建立している。それらの建築様式は、実際にどのようであったろうか。太田博太郎氏は栄西が建立した建仁寺について、当時の建築は残存していないが、建仁寺全盛期の南北朝時代（1336～92）の図（挿図２）があり、その配置を見ると密教色の濃い真言院・止



16　建仁寺復原図（南北朝，図は建物の概略の位置を示す）

図２　大田博太郎著『社寺建築の研究』岩波書店　図16より

観院は中枢部と関連のない別の建物とし、伽藍配置の上からは問題とするに足りず、中心となる堂宇の配置は大陸風（宋風）のものであったと解釈する。栄西の生存当時、伽藍そのものは完成していなかったとしても、これは栄西の計画のうちにあった伽藍配置であったろう[57]とした。

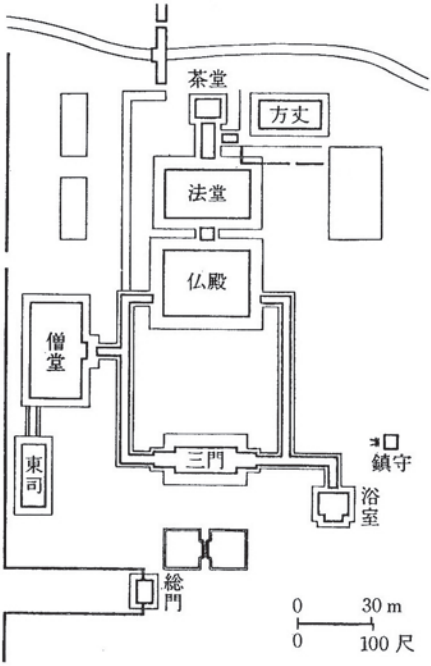
確かに建仁寺は禅宗専門の道場ではなく密教兼修を建前としていた。しかし実際の配置図を見ると、密教の真言院・止観院は歴然と中枢部からは隔たっており、そして茶堂が中枢部にあった。「茶堂」は具体的にどのような施設であったか分からないが、中枢部に独立した施設としてあったことは注目される。宋代の禅院生活では茶が飲まれ、禅寺の日常生活を規定する「清規」にも茶が頻出する。すると、中国宋代の禅宗寺院建築に、その見本となる物（茶堂）もあったのだろうか。

【喫茶養生記】

栄西の功績として、日本で最初の茶書『喫茶養生記』の著述がある。そこでは、茶と桑の効用を示し、健康長寿のために茶と桑の摂取が優れていると勧める。茶の効能は類書『太平御覧』を、桑については薬書『大観本草』を引用し、茶と桑に関する新知識をもたらし、さらに実際に目にした葉茶の製造方法と、その葉茶を点茶で飲用する方法も記録し伝えた。そして栄西は日本の茶祖として讃えられてきた。

栄西は『喫茶養生記』で、茶と桑による身体面からの養生を説いている。もちろん戦争に明け暮れ流行病の多発した平安末から鎌倉にかけて、健康維持は必須の問題であった。しかし茶と桑には、別な意味もあったと考える。茶は座禅の折の眠気覚ましに欠かせず、禅生活の行事に茶は欠かせないものであった。桑も悟りのシンボルである菩提樹の代用物であり、悟りは座禅によって得られる。すると茶も桑も禅に通じるものとなる[58]。『喫茶養生記』には、禅の一言もない。しかし建仁寺の伽藍には茶堂があった。それは茶と桑の普及こそ、禅宗発展に寄与すると考えていたことの証左となるのではないだろうか。

また栄西の孫弟子・円爾を開山とする東福寺の室町時代の復元図[59]（図３）にも、茶堂が見える。東福寺も顕密寺院勢力の強い京都にあったために、創建時には天台・真言を含んでいた。しかしその建築は明らかに禅宗式の配置で、茶堂も大きく描かれていた。この茶堂は実際、どのような目的を持ち、機能し、形であったのだろう。今後の研究の課題としたい。



17　東福寺復原図(室町時代)

図３　大田博太郎著『社寺建築の研究』岩波書店　図17より

【中国の仏教界の状況を伝える】

さて『興禅護国論』は、次のように中国の奇特について述べている。

宋朝に奇特、二十箇あり（中略）七に僧の威儀、乱れず。八に寺中寂静なり。（中略）十一に俗人、菩薩戒を持す。十二に童子、五戒を持す。十三に道俗、無我なり。宋朝奇特、有二十箇。（中略）七僧威儀不乱。八寺中寂静。（中略）十一俗人持菩薩戒。十二童子持五戒。十三道俗無我。（『興禅護国論』巻下　第九大国説話門[60]）

僧侶の威儀が乱れず整然とし、そのため寺中が静寂で、僧だけでなく俗人も、また菩薩戒を守り、童子すら五戒を守り、道に志す人も俗人もみな無我であると記す。栄西が中国に渡った当時、日本の人々は「天竺・唐土、仏法は已に滅し、我が国のみ独り盛んなり。」（『興禅護国論』巻下・第九大国説話門[61]）と、日本人は仏教が日本でだけ盛んだと豪語していた。しかし栄西は、その観点が誤っていると日本人に知らせた。実際に中国に渡り、現地を見たからこそ自信をもって言えることである。中世日本の対外意識

は、他国を蔑視する自己中心的なところがあったという。それも国際交流によって始めて双方の実態を知り、理解が生まれる。栄西は交流の重要性を認識させる契機を作ったといえよう。

【禅の普及と困難と】

そして「戒律は是れ令法久住の法なり。今、此の禅宗は、戒律を以て宗と為す。（中略）天台宗の『止観』に云く、（中略）悪を破するは浄慧に由り、浄慧は浄禅に由り、浄禅は浄戒に由る（戒律是令法久住之法也。今此禅宗、以戒律為宗。（中略）天台宗止観云、（中略）破悪由浄慧、浄慧由浄禅、浄禅由浄戒）」（『興禅護国論』巻上　第三世人決疑門[62]）と、厳格な戒律を守る禅宗を中国から伝え、それによって日本の仏教を浄化し、再興することを栄西は願った。しかしながら、自らの力不足を思い知るのである。

予は是れ扶桑の野人、本より林麓の間に居す。例に随って遠く江海に遊び、垢衣を披して日を度り、独り面壁して以て言無く、甘んじて自ら守りて聞くことなし。深く平生の百拙を**媿**ず。此者少しく古人の行履に倣い、漢家の道風を伺う。数しば懇なれば数しば歇す。纔かに香を炷いて当下に便ち賓主を分かち、幸いに祖令を提ぐ。（中略）日本国に於いて、祖道便ち大いに興ることを得るを欲するか。

予是扶桑野人、本居林麓之間。随例遠遊海、披垢衣而度日、独面壁以無言、甘自守而無聞。深**媿**平生百拙。此者少倣古人行履、伺漢家道風。数懇数歇。纔炷香当下便分賓主、幸提祖令。（中略）於日本国、祖道便欲得大興乎。（『興禅護国論』巻中・第七大綱勧参門[63]）

日本の野人たる自分栄西は、ただ中国の禅を習い、独り言葉もなく座禅を続け、日本の仏法の再興を願っていた。再興は禅の普及によると考えるが、日本で禅宗は受け入れてもらえない、そうした苦衷を、栄西は吐露する。さらに日本の仏教の興隆を願う思いを切々と述べる。

茲れに因って地勢を思い、末世を慮り、稚子を憐れみ、祖道を懐うて、其の廃亡を興さんと欲す。而るに種種の魔縁有って之を妨げ、或いは仏子の、嫉妬の心を起こすもの有り。因って以て之を廃すと〔云々〕。今は只だ是れ此の地を避くべきか。（中略）西府に謗家有り、東洛に障者有り、避けんと欲するに百由旬の地無し。躬を省みんと欲するに智者に非ず。当に之れを如何とすべき。須らく再び巨海を渡って、迹を台岳の雲に悔ますべきと雖も、唯だ恨むらくは、吾が土の利を捨てて、異域の法水に潤わんことを。

> 因茲思地勢、慮末世、憐稚子、懐祖道、欲興其廃亡。而有種種魔縁而妨之、或有仏子起嫉妬心。因以廃之〔云々〕。今者只是可避此地乎。（中略）西府有謗家、東洛有障者、欲避無百由旬之地也。欲省躬非智者也。当如之何。雖須再渡巨海、悔迹於台岳之雲、唯恨捨吾土利、潤異域之法水乎。（『興禅護国論』巻下・第九大国説話門）[64]

日本を思い、未来を憂え、始祖のことを懐い、禅により日本の仏教を立て直し国の興隆を望むが、九州には悪口をいう人があり、京都には邪魔をする人がいる。それを避けようにも智者でない自分には為す術もない。再度、中国に渡り身をくらまそうかとさえ、辛い思いを述べる。

そして『興禅護国論』に「未来記」として、自分の没後五十年して、禅宗が盛んになることを予言する。栄西の生前に、禅宗はなかなか広まらないため、顕密禅を兼ねて行わねばならないが、死期五十年経つころに禅宗は盛んになるだろうと予言した[65]。その予言通り、栄西以降、弟子たちは中国大陸に渡り、中国から僧侶が招かれ、禅宗は盛んとなるのである。

【結語】

栄西が日本の仏教と国の興隆のためと考え、中国から将来したものをまとめてみたい。

＊臨済宗黄龍派の禅宗。釈迦から迦葉に伝えられた涅槃妙心、正法眼蔵（悟りの真髄）を虚菴から伝えられ、もたらした。

＊応器・座具・宝**缾**・拄杖・白払、釈迦から虚菴までの直系の血脈図（禅僧の道具）。

＊僧伽梨（僧の正装の大きい袈裟）。

＊天台新章疏30余部60巻、宋地の台宗酬酢の言、彼の地の名徳文（天台宗系の仏教史料）。

＊菩提樹。

＊宋代の製茶法と喫茶法。茶と桑の効能と新知識。

＊中国南宋代の寺院の建築様式。

＊中国で仏法は滅んでいないという、正確な情報。交流の重要性。

＊北宋の能書・黄庭堅の流れを汲む宋の書風。

＊唐墨と唐筆。

＊舎利信仰。阿育王塔（仏舎利塔、宝篋印塔）そのものも、もたらしたかは不明。

なお絵画についても、栄西の将来や関与が伝えられる作品がある。常盤山文庫所蔵・

重要文化財「送海東上人帰国図」は、日本の留学僧が帰国に際し中国の友人から贈られたもので、江戸の儒学者伊藤東涯は、送られた日本僧は栄西とし「栄西禅師帰朝図」の題で伝来してきた。この作品は、日本に最初にもたらされた本格的な水墨画とされ、重要なものである。しかし近年、板倉聖哲氏は、賛をした鍾唐傑･竇従周は朱熹の弟子で、彼らが日本僧と接点を持ち得るのは紹熙五年（1194）頃、つまり栄西帰国後と推定される。日本僧を俊**芿**等とする説もあり、将来した人物が誰かは決定をみない[66]。

また谷口耕生氏は、重源がもたらしたとされている宋代の絵画「観経十六観変相図」（京都・二尊院）、「浄土五祖像」（奈良・阿弥陀寺）の請来に栄西の関与があったのではないかとされる[67]。それら絵画をもたらした可能性も、そのほか見落としているものもあるかもしれないが、現時点でわかる限りは以上である。

栄西が中国で行った事績としては、天台山万年寺の山門や東西の両廊廡の建立、天台山中の観音院・大慈寺・智者塔院など寺院建築の修復・建立、天童山景徳寺の千仏閣の為に良材を送ったことが挙げられよう。

栄西は歴史の教科書には、日本に初めて禅宗の臨済宗をもたらしたと記される。ところが近年、名古屋市大須の真福寺から大量の栄西自筆文書が発見され、その内容が密教に関するもののため、栄西は生涯密教僧であることが強調され、『喫茶養生記』も密教の教理を取り入れ、密教を基盤とした書と言われるようになった。しかしながら栄西の主著は『興禅護国論』であり、創建した寺院の代表は博多の聖福寺・鎌倉の寿福寺・京都の建仁寺であり、当初、天台・真言を兼ねても禅宗寺院であったことは確認しなくてはならない。確かに栄西は晩年まで密教を否定せず、研鑽を怠らなかった。しかも鎌倉幕府は既成の権門に倣い、鶴岡八幡宮などでは密教の修法を行い、朝廷・院・摂関家と並立させようと意図したのであった。その当時の密教は、教義より「現世利益」である息災・増益・敬愛・調伏などのための修法に重点[68]があった。そうした密教の在り方、また僧の在り方に栄西は納得できずに中国に渡ったことも、確認しなくてはならない。栄西の思想に密教が深く存在していたことは間違いないが、戒によって律せられる禅宗によって日本の仏教を再興したいという思いもまた強かった。そうした栄西の思想を、栄西その人がもたらし、残したものそのものから、汲み取ることができるのではないだろうか。

【注】

1　佐藤秀孝「明庵栄西の在宋中の動静について」上・中・下『駒澤大学仏教学部論集』第43-45号　平成24-26年10月、谷口耕生「栄西の入宋と東大寺復興」(『寧波の美術と海域交流』中国書店　2009年)

2　藤田琢司編『栄西禅師集』禅文化研究所　2014年　532頁。

3　前掲　注２　552頁

4　前掲　注２　488頁

5　前掲　注２　532頁

6　藤田琢司編著『元亨釈書　訓読』上巻　禅文化研究所　2011年　29頁。『新補増訂　国史大系』第31巻　42-43頁。

7　前掲　注１　佐藤〔上〕83頁

8　『仏祖統紀』巻43(『大正新脩大蔵経』49　394頁。「呉越王錢俶。天性敬佛。慕阿育王造塔之事。用金銅精鋼造八萬四千塔。中藏寶篋印心呪經　此經呪功云。造像造塔者。奉安此呪者。即成七寶。即是奉藏三世如來全身舍利。布散部内。凡十年而訖功。今僧寺俗合有奉此塔者。」

9　大塚紀弘「宝篋印塔源流考―図像の伝来と受容をめぐって―」『日本仏教総合研究』第10号　2012年５月　日本仏教総合研究学会　51頁

10「志摩群今津登志山誓願寺大泉坊蔵呉越国王所造阿育王宝塔図」福岡市博物館『栄西と中世博多展』図録　図16解説。青柳種信『筑前国続風土記拾遺』巻之48　誓願寺。

11　前掲　注９大塚　52頁、前掲　注10、奈良国立博物館『聖地　寧波』展図録　2009年　図33解説、尾上寛仲「天台入唐僧日延」『天台学報』第10号　天台学会　1967年、竹内理三「入唐僧日延伝釈」『日本歴史』第82号　1955年。

12『扶桑略記』26　村上天皇　応和元年十一月廿日。(『新訂増補　国史大系』第12巻)

13　内藤栄「重源の舎利信仰と三角五輪塔の起源」(『鎌倉期の東大寺復興―重源証人とその周辺―』　東大寺　法蔵館　2007年)61頁。

14　前掲　注９　46-47頁。

15　前掲　注２　533頁

16『南無阿弥陀仏作善集』東京大学史料編纂所影印叢書2　東京大学史料編纂所編　八木書店　2007年　105頁

17　楼鑰『攻媿集』巻110　「阿育王山妙智禅師塔銘」・「日本国王、閲師偈語、自言、有所発明。至遜国以従釈氏、歳修弟子礼。辞幣甚恭、且以良材建舎利殿。器用精妙、荘厳無比。」(四部叢刊初篇　1091-1092頁。)

18　横内祐人「重源における宋文化―日本仏教再生の試み」(『アジア遊学』122号　勉誠出版　2009年）30頁。

19　前掲　注２　533頁

20　『興禅護国論』巻上　第三世人決疑門「安然和上教時諍論云、乃知三国諸宗、興廃有時、九宗竝行。乃至依教理浅深、初真言宗。(中略)最為第一。次禅宗。(中略)故為第二。

21　『興禅護国論』巻上　第三世人決疑門「伝教大師内証仏法相承血脈譜云（中略）智証大師教相同異云（下略)」

22　関口欣也『五山と禅院』小学館ギャラリー新編名宝日本の美術15　小学館　1991年。

23　『胎口決』は、天台密教・谷流の祖・皇慶、大原流の長宴の教えを伝授するもの、『出纏大綱』は、顕密の底流は異ならず、すべての事理は密教と述べるもの、『秘密隠語集』は、仏法の奥義を密教に求めるもの、『菩提心論口決』は、真言秘教を衆教の源とするもの。

24　小此木輝之「台密葉上流の展開過程」『印度学仏教学研究』第52号　1978年、獅子王円信「台密葉上流祖栄西の禅密観」『日本仏教学会年報』40号　1975年。

25　原田正俊「日本の禅宗と宋・元の仏教―生活規範と仏寺法会」(『アジア遊学』122号）18頁。

26　久保木彰一『日本名跡叢刊』66　二玄社　1982年。

27　前掲　注２　533頁。

28　前掲　注２　427頁。

29　姚国坤「栄西が天台山に赴いた経緯と茶に関する事跡」(『栄西「喫茶養生記」の研究』所収　宮帯出版社　2014年)。宋・葉紹翁撰『四朝聞見録』巻二　乙集　万年国清(上海古籍出版社　2012年　43頁)。「高宗喜占対。宋之瑞面対。上問以所居。之瑞対曰。臣家于天台。上又曰、聞彼多名山勝刹、孰為之冠。之瑞対曰、唯是万年、国清。上大喜歎、之瑞遂階両制云。」

30　高橋秀栄「関東天台と十不二門指要鈔―泉涌寺開山俊**芿**―」(『金沢文庫研究紀要』第13号）77頁。『十不二門指要鈔』に「其故ハ天竺ノ僧来唐土ニ見此山ヲ、天竺ヨリ来タリト云也。説法花ノ流也トテ天台教院ニナシテ山ノ上下ニ二寺ヲ立ツル也。此峯（ママ　北峯）ハ明州ト云国ノ人也。此国ノ人也。此国ハ日本ヨリ唐土ニツク漸也。此処ニ小寺アリ。名花亭此ノ寺ノ長老也。我朝ノ葉上僧正、東大寺春乗房等ノ師也。此時マテハ日本ノ僧侶ハ不シテ入京、明州ニテ学問シテ帰朝。」81-82頁。

31　龍山徳見『黄龍十世録』(『五山文学新集』第三巻　玉村竹二編　東京大学出版会　1969年　207-209頁。)

32　前掲　注１　佐藤〔中〕14-119頁。

33「鑰奉祠東帰、嘗往遊焉。驚歎傑特、目眩神駭、過于耳聞。敞請記其事。老矣学落、不能形容。姑記大概、以表吾郷之勝。海内好奇之士、欲游而未遂者、覧此、則太白之景、思過半矣。虚菴価素高、禅子向方。島夷亦聞其名而帰之。加以願力深重、才刀恢恢、巧匠瑰材、成此勝事。観者無不羨歎。或請飾之。敞曰、殫力竭財、幸躋登茲。行且謝去。若丹**臒**華飾、尚有り頼于後之人云。」楼鑰『攻**媿**集』巻五七「天童山千仏閣記」（四部叢刊本　529頁）。石井修道「中国の五山十刹制度の基礎的研究」㈠（『駒澤大学仏教学部論集』第13号　昭和57年10月）95-100頁）

34　前掲　注１〔中〕121頁。『大正新脩大蔵経』　T2293_.70.0032a28-29禪師隨喜而可受灌頂法云云仍榮西製灌頂式授唐禪師云云。其日僧正委記有之。

35　前掲　注１〔中〕122-123頁。『道元和尚広録』巻六「永平禅寺語録」（『道元禅師全集』第四巻　春秋社　1988年）

36　前掲　注６　藤田　33頁。

37　閑叟如蘭「洛陽東山建仁禅寺開山始祖明庵西公禅師塔銘」（『栄西禅師集』藤田琢司編　禅文化研究所　2014年、428頁）

38『嘉定赤城志』（『宋元方志叢刊』7496頁　「天台　禅院一十有五　万年報恩寺（中略）淳熙一四年日本国僧栄西建三門西廡、仍開大池」）

39　前掲　注33　楼鑰『攻**媿**集』巻57「天童山千仏閣記」（四部叢刊本　529頁）

40　多賀宗隼『栄西』吉川弘文館　1965年　66頁に大東急記念文庫所蔵本の『秘密隠語集』奥書を掲載。また佐藤氏は、『秘密隠語集』の奥書に万年寺とあるのは、万年寺と天童寺を行き来していたためとし（前掲　注1〔下〕99頁）、米田真理子氏は万年寺に戻ったため（米田真理子「栄西の入宋」『海を渡る天台文化』勉誠出版　2008年）とする。

41　前掲　注16『南無阿弥陀仏作善集』101頁

42『今昔物語』巻12第７　於東大寺、行花厳会語（岩波書店『新日本古典文学大系』35。 111-112頁）、『宇治拾遺物語』第103話　東大寺華厳会事（岩波書店『新日本古典文学大系』42　209-210頁）。

43　小林剛編『俊乗坊重源史料集成』奈良国立文化財研究所史料第4冊　吉川弘文館　1965年　286頁。

44　前掲　注２　533-534頁。

45　岡山県立博物館『栄西』展図録　図28（袈裟・数珠及び竹製箧）、図27（五鈷鈴・五鈷杵）。

46　細川涼一「鎌倉時代の律宗と南宋」（『アジア遊学』122号　17頁）

47　楼鑰『攻媿集』巻57「天童山千仏閣記」。『宝慶四明志』巻13。

48　坂出祥伸「量詞「圍（囲）」と「消息」「腕」の語義」（『新しい漢字漢文教育』第57号　2013年11月）

49　藤田明良「南都の「唐人」―東アジア海域から中世日本を見る」『奈良歴史研究』54号　2000年９月　25頁。

50　岡元司『宋代沿海地域社会史研究』汲古書院　2012年　388頁。

51　前掲　注48　藤田　25頁。

52　前掲　注１　谷口耕生「栄西の入宋と東大寺復興」　51-52頁。

53　東大寺図書館蔵。『南都仏教』第16号（1965年）口絵解説に、堀池春峰氏の同書の釈文が次のようにある。

「献上　唐墨八十五挺　唐筆七十五支　右、華厳会捧物料唐器相共□

別進（勧進所）、墨百内十五砕候了、筆百内廿五虫咬候了、忘却不令進候之間、如此之過□出来候了、唐墨膠相副候ぬれハ、雖朽□為要物故進候也、修学者之御料進候□可令分献御候歟、附便令進候之条、以外過怠候、可令免際御候歟、仍言上如件。

建永二年六月廿一日　造東大寺大勧進栄西」

54　野村俊一「栄西の建築造営とその背景―東大寺鐘楼の意義をめぐって」（『アジア遊学』122号）43-44頁。

55　太田博太郎著『社寺建築の研究』岩波書店　1986年　54頁。

56　前掲　注54　野村　50頁。

57　前掲　注55　太田　75-86頁。

58　岩間眞知子『喫茶の歴史』大修館書店　2015年　143-159頁。

59　前掲　注55　太田　59頁。

60　前掲　注２　553頁。

61　前掲　注２　272、554頁。

62　前掲　注２　520頁。

63　前掲　注２　215-6、539頁。

64　前掲　注２　280-1、556頁。

65　舘隆志「栄西『未来記』と蘭渓道隆」　『駒澤大学　禅研究所年報』第25号　2013年。

66　『常盤山文庫名品選　墨の彩り』（2003年）作品94板倉聖哲氏の解説。

67　前掲　注１　谷口耕生「栄西の入宋と東大寺復興」54-57頁。

68　速水侑「鎌倉政権と台密修法」（『平安仏教と末法思想』吉川弘文館　2006年）、西弥生『中世密教寺院と修法』序章　勉誠出版　2008年）